

書評と紹介

石浜弘道著

『カント宗教思想の研究』

——神とアナログア——

北樹出版 二〇〇二年一〇月三〇日刊

A5判 二五五頁 三八〇〇円＋税

木村 勝彦

哲学史におけるカントの意義は、時代による毀誉褒貶のうねりは多少あるにせよ、今日においてもなお大きい。しかし、その名を聞いてただちに宗教あるいは宗教思想という問題領域を連想する人は少ないであろう。カント自身が「コペルニクスの転回」と自負した認識論上の根本的な問い直しと、それを起点として倦むことなく続けられた理性批判の営為とを画期的業績として認める人も、さてカントと宗教との結びつきについて評価を迫られるとなれば、大方は否定的あるいは消極的な態度を示すに相違ない。しかし、その浩瀚な著作群をひとたび繙いてみれば明らかなように、カントは初期から晩年に至るまで一貫して、宗教の問題について実に多くのことを語っている。むしろ、宗教的な問題について正しく語るためにこそ、カントは哲学的思索を理性批判というかたちで全体的かつ徹底的に展開したのだとさえ言い得よう。カントの理性批判は、理性の限界を弁えることなく独断的主張をなす形而上学を根底から覆したが、そうした形而上学の論題であると同時に宗教的な問いの対

象でもある「神」「世界（自由）」「靈魂」という三つの理念については、カントがそれを否定したことは一度たりともなかった。有体に言えば、形而上学そのものを否定したことも、一度としてありはしなかったのである。したがって実は、カントが宗教について執拗に語り続けたのはなぜかという点が、カント理解の要諦であると言わねばならないし、批判哲学のもつ宗教思想としての内実を理解することこそが、極めて重要なのである。しかし、カント研究の大勢は未だに、宗教の問題をカントの哲学体系において必ずしも正当に位置づけることなく、異質な要素として看過しがちであると言わざるを得ない。

本書において著者は、何よりも書名が雄弁に示しているように、こうしたカント哲学における宗教の問題に正面切って取り組み、カント解釈の一つの可能性を示した。著者はここで、あえて関心をカントにおける神観の問題に収斂させ、それを解明するにあたって、古代ギリシア以来の西洋の哲学・神学の歴史の上で大きな意味をもち続けてきたアナログアという概念に着目する。著者自身が自負しているように、少なくとも我が国のカント研究において、これほどアナログアの論理に重要な意味を見出し、カントの批判期から晩年に至る諸著作を一貫してそれによって説明しようとした研究はほとんどなかったと思われる。その意味では、文字通りの労作であり、斯界に対する挑戦的な問題提起として、高く評価されるにふさわしいと思われる。全体は六章から構成されているが、主に考察の対象とされているのは『純粹理性批判』などのいわゆる三大批判書と『宗教論』、『宗教哲学講義』、さらには晩年の『学部争い』およ

び遺稿集『オプス・ポストウムム』である。取り上げられる著書は多岐にわたるが、アナログア概念を通してカントの神観を解明しようとする著者の強固な問題意識によって貫かれているため、実際に考察される箇所は限定されたものとなっている。一貫した主張が反復して展開されることにより論述は概して明快であり、哲学的著作にありがちな晦渋な印象からは免れている。むしろ、後にも言及するが、今少し紙数を費やして詳細に論証すべきではないかという部分が少なからず見受けられることは否定し難い。

まず第一章「神的世界探求の論理」では、古代ギリシアのピタゴラス派にまで遡って「既知のものを手掛かりとして、未知の真理を発見する方法」としてのアナログアの歴史が概観されている。そして、特に中世のトマス・アクィナスなどによって、「質的に異なるものの間の関係のアナログア」、すなわち「比例性のアナログア」が神探求の論理として確立されていたこと、さらにはそうした「比例性のアナログア」がカントの哲学を背後から支えるものとして彼の主要な著作のすべてに現れ、方法論として働いていたということが指摘されるのである。この章の第二節「カントにおけるアナログアの成立とその働き」は、次の二章以下において展開される論述の全体像を俯瞰するという役割を担っているが、論述を通底する著者の主張の要点は、カントが理性批判の営みのなかで、未知なる超感性的な世界を理性の働きによって既知なるこの世界との関係において語ろうとしていること、そこで働く論理とは一貫してアナログアなのだという事に尽きる。そしてまず、物自体につい

て限界概念としての積極的認識を認める『プロレゴメナ』を主な論拠として、人間理性にとつて既知の領域である「限界内」から未知の領域である「限界外」の超感性的なものへの接近を、カントはアナログアを介しての超感性的なものの感性化、すなわち象徴的擬人観として把握していたと主張される。これによりカントは擬人観が陥りがちな独断化を避けると共に、無神論に陥ることもなかったというのが著者の論旨である。著者によれば、以後の批判哲学的な諸著作は、アナログアの論理を駆使して「統制的原理として働く理念としての神」から「最高善の根拠としての有神論的な神」、「道徳的な目的の国における立法的元首としての神」、「世界の立法者・統治者・審判者としての人格的な神」へと、「ある種の深化・発展」を遂げていくことになる。そして以下の各章は、こうしたカントの神観の「深化・発展の層」の詳細な検討に捧げられているのである。

第二章「理論的世界における神」では、超感性的世界に対するカントのアナログア的アプローチが『純粹理性批判』において本格的に遂行されていることが指摘されている。著者によれば、『純粹理性批判』においてカントはまず、認識を成立させる上でのアナログアの働きに注目し、現象界を統合するために概念の論理的普遍的統一をもたらすものとして「経験のアナログア」を設定する。これは各関係項の間に質的な差異を認める「哲学的アナログア」であり、二つの関係項に共通するアナログン（共通項）としては因果律が働くこととされるのであるが、カントがここで企図していたのは、混沌とした諸現象にアプリアリな概念関係を適用し、現象界を一つの秩序ある世界として形

書評と紹介

成することであつた。言うまでもなくこれはあくまでも「経験のアナロギア」であり、著者自身が述べているように、経験の諸対象を一定の秩序をもった多様として統一的に捉えるために導入されたものである。しかし、一見すると超経験的な世界への適用を認められていないように思われるアナロギアは、「超越論的弁証論」で問題とされる理念の統制的使用の限りにおいては、超経験的な世界への適用を認められており、「アナロギアによる神アプローチの道」が開かれているのだと、著者は主張する。そしてカントが「弁証論」において否定した神の「存在論的証明」「宇宙論的証明」「自然神学的証明」について、それがなぜこの順序で否定されなければならなかったのかを指摘した上で、カントは「自然神学的証明」を必ずしも全面的に否定したのではなく、超越論的批判の立場とは異なるアナロギアの立場からは明確に肯定しているのだとされる。さらに、ここに示されているような「アナロギアによる神アプローチ」は、人間理性にとつて直接接近不可能な異質の対象である神に近づくき得る唯一の「緊急策」としてカントにより提示されていることが理解されるべきだと、著者は述べる。要するに著者は、『純粹理性批判』の超越論哲学の立場では、せいぜい統制的原理としての神の理念があくまでも理論的な枠組における理神論の神として許容されるに過ぎないが、それを超えてさらに豊かな神観が、すでに萌芽的に示されているというのである。そのうえでさらに著者は、統制的原理としての神という理想がアナロギア的なアプローチにおいては自ずと人格化されることになるとした上で、『純粹理性批判』においても統制的原理を補助

するものとして擬人観が認められており、世界創始者である最高英知者としての有神論的な神が想定されていると主張する。しかし、そうした有神論的な神が必ずしも宗教的レベルの姿を持つものではないという点に、著者は『純粹理性批判』における神解明の限界を認めるのである。

続く第三章『判断力批判』におけるアナロギアでは、前章で述べられた有神論的な神が『判断力批判』において本格的に考察され、アナロギアの構造が明確にされることが指摘される。『判断力批判』において主要な問題とされているのは美の普遍性であり、それを超感性的なものとしての理念によつて根拠づけられることであるが、この超感性的なものそのものは規定困難であるゆえに、ただちには美との関係も明らかにすることはできない。それゆえカントは、超感性的なものを「人倫的善」として実践の対象にすることにより、美と超感性的なものとの関係を規定可能にしたのであり、これが「善の象徴としての美」にほかならない。こうして美が善の象徴となり、善が感性化されるという美と善とのアナロギア関係により、美とその属性とが善の属性（普遍性）によつて基礎づけられることになる。さらに著者によれば、このようなアナロギアの働きは「目的論」において自然を説明する際にも機能するのであり、それは反省的判断力が自然の多様を統一する原理としての合目的性において現れる。この合目的性の実質的な働きは目的の因果性とのアナロギアによつてなされるのであるが、カントがこうした合目的性を「ある悟性」によつて目的統一として設定されたものであるかのように語るとき、それは論証的悟

性とのアナロギアを通して導かれる最高悟性としての直観悟性によつて根拠づけられるのである。いずれにせよ、「目的論」におけるカントの最終的意図は、人間の認識能力とのアナロギアによつて現出する超感性的なものとしての直観悟性により、自然界統一の可能性を考えることであつたのだと、著者は主張する。カントはこうした超感性的なもの（神）の働きや特徴を、「方法論」においては実践的関連において捉えようとするのであり、それゆえ神は最高善実現とのアナロギア関係によつて特徴づけられることになる。こうして象徴する人間の悟性から象徴されるものとしての神の悟性が全知として、象徴する実践性から象徴されるものとしての実践理性が神の全能として考えられることになり、さらにそのうえに、実現すべき究極目的から実現の条件としての慈愛と正義とが神の特徴として考えられてくる。要するに『判断力批判』では、理神論の神を超える有神論的なもの、すなわち道徳的な目的の国における道徳的立法者にして世界統治者でもあるような神が、実践的に深められるべき神として明確にされていると、著者は主張する。

第四章「実践的世界における神」では、まず『実践理性批判』を中心に、道徳的アナロギアから説明された神について論及されている。すなわち、理論的な認識の領域で問題とされた理神論の神から、実践的世界において人格化され、道徳的立法者・世界統治者として有神論の神へと深められた神観が、どのようにして措定されるのかが解きほぐされるのである。著者はここでまず、神に関する述語規定において、『純粹理性批判』と『実践理性批判』との間に見られる差異を指摘する。すなわ

ち、『純粹理性批判』では神はあくまでも統制的理念としての役割に限定されるものであるゆえに、世界創始者・最高英知者・最高原因者・根源的存在者等の抽象的な神規定にとどまっているのに対して、『実践理性批判』ではさらに進んで全知・全能・永遠などが中心的な問題となり、より具体的で豊かな内容をもつて語られるようになるというのである。そのうえで著者は、アナロギアは「明らかなもの」から「明らかなでないもの」を推察する方法であり、後者は前者の制約を受けるため、道徳的アナロギアによつて語られる『実践理性批判』の神はどうしても道徳的性格を持たざるを得なくなると指摘する。つまり人間による最高善の実現の努力や、幸福に値するようになるための道徳的精進というような文脈において神の述語規定が求められるため、道徳の彼方にある人間の罪業性に対する「許しの愛の神」というものが、カントにおいては明らかに成らないというのである。アナロギアがあくまでも道徳的アナロギアにとどまり、その制約下における神解明でしかないところにカントの神規定の限界が存すると、著者は指摘する。そういった意味で、著者は『実践理性批判』をはじめとする理性批判の体系的著作よりもむしろ、講義録である『宗教哲学講義』の方にカントによる神解明の可能性の豊かさを見出しているようである。この章の後半は『宗教哲学講義』において提示されている「神への三つのアプローチ」について考察されている。著者によれば、『宗教哲学講義』ではアナロギアを遂行するうえで独断的擬人観や理神論に陥らないようにするため、カントは中世神学で展開された「否定の方法」「卓越の方法」にもあえて

書評と紹介

言及することにより、神解明の方法としてのアナログアの卓越性を論証しようとするのである。さらにカントは、伝統的なアナログアの二つの形態である「比例性のアナログア」と「帰属のアナログア」との相違にも言及し、自らは「比例性のアナログア」を採用するとしているが、著者によればその実質は、創造者と被造物との因果関係を前提した「帰属のアナログア」であるということになる。すなわち、それは「根拠と帰結」関係によって神に対して使用されるアナログアであり、帰結としてのこちら側の世界からその根拠としての神が指定されるというものである。そして著者によれば、こうした「帰属のアナログア」によって現出する神の述語は、こちら側すなわち認識する人間の内容が認識論的レベルから実践的・宗教的レベルへと深まっていくほどに、単に原理的なもの（理神論）から人格的なもの（有神論）へと深化していくことになるのである。

第五章「有限性の克服を目指して」においては、『宗教論』における神観が論じられている。まず著者は、この著作の第一編において示されている「根本悪」の思想に着目し、人間本性に深く食い込み、人間の力ではいかんともし難いこの根源的な悪をいかに克服し、善の勝利へと導くかが『宗教論』全体の主たるテーマであったと指摘する。言うまでもなく、そうした悪の克服と善の勝利という思想は、第二編においてカントが提示する「心術の革命」によって表現されるのであるが、実際には悪の克服は実践主体としての人間自身の力によっては困難であり、その背後に人間を鼓舞し悪を克服する善の理念としてのイエスが必要不可欠なものとして考えられていたのだと、著者は

主張する。すなわち、善の勝利を説く第二編においてカントがイエスの問題をもち出したとき、そこにはイエスの二重の働きが想定されていたのであり、一つは道徳的努力の目標・模範としてのイエスであって最上善に対応し、もう一つは道徳的努力を内面より支える原動力としてのイエスであって根源的道徳的素質に対応する。そして、このようにキリスト教の教義上のイエスが道徳的に解釈されることにより、他律的な啓示の神学が自律の哲学へと内在化されており、『実践理性批判』における道徳的目標である最上善が、人格化した模範というかたちでわれわれにとってより近づきやすいものとして提示されていると、著者は述べている。そして『宗教論』第三編においては、類としての人間における悪の問題が扱われるが、こうした悪を克服するためには、徳の原理の下に一つとなる倫理的共同体の建設が不可欠のものとされ、そうした倫理的共同体の理念の実現者として要請されるのが神である。道徳的理性に関連しながらも道徳的理性能力を超えたところに位置するこの超越的な神は、人間理性の限界概念としての意味を有しつつも、超感性的なものに対する理性の無力さを補うものとして導入されているのであり、それは『実践理性批判』の神とは異なっており、倫理的共同体実現に向けてより積極的に働く人倫的な神にほかならないと、著者は指摘する。著者によれば、この第三編において示された神観念は、道徳的理性の実践的アプローチと共にアナログアの媒介によって現出してきたものであり、カントの理性哲学のなかでも極めて積極的な意義を与えられるべきものである。

そして最後の第六章「理性を通して語る神」では、まず第一節において『学部』の争いを考察対象として、宗教の道徳的解釈というカントの基本的な考え方が振り返って概観され、それを受けて第二節では晩年の遺稿集『オプス・ポストウム』を題材として、そうしたカントの宗教思想をめぐる解釈の問題について新たな問題提起がなされる。周知のように『学部』の争いでは哲学と神学との立場の相違が根本的な問題設定とされているが、著者はこれを手掛かりとしつつ、カントの基本的立場があくまでも、単なる理性の限界内で人間の道徳的向上にいかに関与したかという限りにおいてのみ宗教を問題とするというものであったことを確認する。そしてカントにおける宗教とは、有限な人間理性が近づき得る様式で、道徳的理性による実践を通して把握されるものにほかならず、その結果まさに「宗教は純粋に理性の事柄」となり、「私たち自身の理性を通して語る神」が現出することとなる。しかも著者によれば、カントはこのように宗教を道徳的次元における超感性的世界として「理性の限界内」で論じながら、同時にまた「理性の限界外」の宗教をもアナログア関係によって示し続けようとしたのである。さらにこれを受けて第二節では、カントが『オプス・ポストウム』においてこれまでの諸著作を踏まえながらも、神の存在を内在的に強く確信するという立場を心情的に徹底させ、「道徳法則を通して語る神」という新たな神観が強調されると、著者は指摘する。すなわち、カントの心の内に響く定言命法、義務の声などは、最晩年のカントにおいては神の福音、神の啓示として捉え直され、そこにはまさにカントの「道徳的啓

示体験」とも称すべきものが示されているのだと言う。こうして、終始一貫して「敬虔な道徳的有神論者」であったカントは、『オプス・ポストウム』におけるアナログアによって、神をめぐるそれまでの主要な諸著作の立場を乗り越え、「道徳法則を通して語る神」という神観の頂点に到達したのだと、著者は『オプス・ポストウム』を最大限に評価するのである。

以上、概観したように、この著作はアナログアを基軸として、カントの批判期から最晩年にまで至る諸著作を神観の変遷というかたちで捉え直したものであり、極めて異色の研究書となっている。ことに『純粋理性批判』以降のカントの思想的展開を、理論的な領域で問題とされた理神論の神から、実践的世界において人格化された有神論の神へと神観が深化していく過程として捉え、「道徳法則を通して語る神」という『オプス・ポストウム』の「道徳的啓示体験」の表明において頂点に到達するというカント理解は、全体として極めてユニークであると言わなければならない。しかしながら、そうした著者の独創的解釈を十分に認めながらも、なお幾つかの点では疑問を呈せざるを得ない。たとえば著者は第二章で『純粋理性批判』が内包する幾つかの矛盾点を挙げた上で、「これらの矛盾が生じた理由の一つは、超越論的論理によりすべてを理性必然的に論じきろうとしたところにある」と指摘し、「超越論的論理の語りえない部分には別の論理をカントは導入していたのではなからうか」との仮説を提示する。こうした解釈の態度は、基本的には他の諸著作を理解する場合にも共通しており、著者の指摘する「別の論理」がアナログアであることは言うまでもない。ア

書評と紹介

ナロギアの論理を読み取ること自体は著者の解釈の視点として十分に可能だと思われるが、カントの超越論的な理性批判の哲学が確定しようとした限界を乗り越え、「超越論的論理で語りえない部分には別の論理をカントは導入している」と断定することが、それほど簡単に許容され得るかについては、さらに慎重かつ詳細な論証を費やさねばならないであろう。あくまでも有限な人間理性の立場にこだわり続けたカントであつてみれば、批判哲学という彼の透徹した思想と宗教的な問いとがどのようなにして、またどの地平において切り結ぶのか、ことはそれほど容易ではないように思われるからである。そういった意味では、各著作を読み解く著者の作業の進め方には、いささか性急かつ断定的に過ぎるという印象を否めない。また、通常のカント研究書とは異なつて、『判断力批判』ではアナロギアについてまとまつて論じられているという理由から、『実践理性批判』の考察に先立つて『判断力批判』を取り上げているが、カントの思想的展開が神観の深化と対応するという著者の論点からすれば、やはり通常の順序で検討した方が説得力をもったのではないかとも思われる。前批判期の著作や、批判期における三大批判書以外の諸著作、『宗教論』第四編などがほとんど取り上げられていないことも、アナロギアの論理がそこで展開されているかどうかという論点とは別に、カントの思想の内在的理解という点では問題があろう。またそもそも、信仰と知識との対立という問題を問いつけたという意味ではカントは紛れもなく独自の宗教思想を展開していると思われるが、それでも「アナロギアの論理で神的世界を明らかにする」とか、「神ア

プローチ」「神解明」「神規定」というような主題設定が、果たしてカントの思想に馴染むものであるのかということについても疑問なしとしない。

しかし、この著作が従来のカント研究においてほとんど顧みられなかった（あるいは慎重に敬遠されてきた）アナロギアの論理によつてカントの神、神観の内容を解明するという問題に正面から取り組んだという点で、この分野に重大な問題提起をなしたことは高く評価されなければならない。多少疑問となるような点を内包しながらも、新たなカント研究の地平を切り拓こうとする勇氣ある営為は、精密な文献解読に終始して、カントが本来何を問うていたのかという哲学的にして宗教的な問題を看過する多くの研究に比してはるかに生産的であり、刺激的である。研究分野を同じくする者の一人として、著者の業績に敬意を評し、多大な刺激を受けたことを率直に述べておきたいと思う。